

人生劇場の楽屋

楽屋はあるでしょうか

楽屋があって
ごくろうさん と言って
もらえればいいのに

悪い役をかった人も
いい役をかった人も
ともに
ごくろうさん と言って
もらえる場所があればいいのに

すてきな名優がよって
すてきな芝居をしているのだったら
いい役も悪い役も
かすが 残らないのだったら
いいのに

舞台が終わって楽屋に戻れば、悪役も善人役も、お互いに
「ご苦労さん」
「お疲れさん」
と、言葉をかけあいます。

ちなみに、水戸黄門の舞台の楽屋を覗いてみますと・・・、
悪代官「いやー、今日は格別暑いすなー。ビールでも一杯どうですか」
黄門さま「ほおー、そりゃーいいすな。ウワッハッハッハ・・・」
こんな楽しい光景が繰り広げられているかもしれません。

上掲の詩の作者は、そうした舞台の楽屋にことよせて、実生活で良い役を与えられた人も、悪役に廻った人も、人生が終われば「ご苦労さま」とその労をねぎらってくれる、そんな楽屋があって欲しいと願っています。
その人生の楽屋こそ「お浄土」という世界です。

思えば、私たちは人生劇場という舞台上、さまざまな役を演じてきました。

この私は檀家さんの前では、「光明寺住職」という役を仰せつかっています。また、家庭内にあっては「夫・父親」の役を与えられています。
いずれ病人の役、死んでいく役も引き受けなければならないでしょう。

しかし、どんな役を与えられたとしても、この人生劇場の役が終われば、「長々人生ご苦労さん。また逢えて良かったですね」と言える、心温まる場所があるのです。

それが人生劇場の楽屋、すなわち、「お浄土」なのです。

平成17年8月 「光明寺だより41号」より